

うごく影：CONNECTEDkindの学びの風景

神田和可子

影は光の位置が変わるたびに伸び縮みし、濃淡をゆらしながら姿を変える。光がわずかにゆれば影もゆれ、光と自然物（物体）の関係によってその表情が生まれていく。

CONNECTEDkindに出会ったのは、世界中の人々が触れ合うことをためらい、距離（ソーシャルディスタンス）を保ち、感染者数が連日のように報道されている時期だった。人と人とのあいだに隔たりが生まれた日常の中で、CONNECTEDkindは物理的に交わることのできない私たちを結び合わせてくれた。場所も国境も越え、パソコンの画面越しに映し出される人と「いま」を共有できる場であった。それは機能的にCONNECTするだけでなく、目には見えない生活世界を手繰り寄せる感覚をも回復させる時間でもあった。

この実践が学校教育に何をもたらさうのか。単なるデジタルツールの活用を通じたアートの交流や鑑賞の試みだったのだろうか。むしろCONNECTEDkindは「評価」という枠組みそのものへ問いを投げかける存在だったのではないだろうか。

このように考えるようになった背景には2つの出来事がある。一つ目は、鈴木陽子先生の実践との出会い。二つ目は『モーションシルエット：かげから生まれる物語』という絵本の存在である。まず、鈴木先生の実践は心動かされる発見や驚きに満ちていた。教室の空気さえ、穏やかな時間がゆるやかに流れているようだった。そこには、いわゆる「教師らしい」姿はなく、子どもたちを共感的に見守り、教師自身も子どもの作品に耳を澄ませるように想像力を働かせていた。子どもたちは思い思いのイメージをのびやかに表現し、「評価されている」対象としてではなく、ありのままの自分が「受け入れられている」という安心感に包まれているようだった。そして『モーションシルエット：かげから生まれる物語』は、読者によって光が当てられると影が立ち上がり、影の形が物語の余白を広げていくというユニークな絵本である。この絵本の発想とCONNECTEDkindの実践には共通する部分がある。それは、到達目標が予め決まっていないという点である。絵本では読者が、CONNECTEDkindでは表現者が、自由に世界観を構築できる。

絵本を通して、私はCONNECTEDkindの素材（写真）は、光、自然物、撮影者の意図、

そしてその瞬間の空気までも含んだ一瞬を切り取った一点でしかないことに気づかされた。そこから物語を紡ぐのは写真を受け取った人の想像力である。さらに、写真をもとに生まれた作品もまた、鑑賞する人によって新たな世界観が生み出されるのである。

想像とは「ここにあるものを手がかりとして、ここにはないもの、つまりは不在のものをたぐり寄せる、あるいは創り出すという精神のいとなみのことである」(鷲田, 2019)。描く、語る、鑑賞する、そしてまた誰かの日常とつながる。こうした循環は、学校の中に閉じ込められた「教科」の枠組みとは別次元にある。分断された領域で扱われる知識は、暗記テストでは効果を発揮するかもしれないが、世界と結びついた生きた思考とは言い難い。

近代教育は労働市場の要請を反映して形成されてきた。目的に向けて手段を積み上げる世界では、学びは計測可能である必要がある。効率を重んじ、標準化を推し進め、点数という単一の尺度で序列化する。その枠内で生まれた成果だけが価値あるものとして扱われてきた。しかし、この枠組みに収まらない学びが確かに存在する。影が光のゆらぎで姿を変えるように、私たちの思考や感性は状況や関係の中でたえず動いている。

CONNECTEDkind の作品は「評価」という枠には収まりきらない領域を、光のように照らし出す。素材(写真)の中にあるのは一瞬の影だが、立ち上がる物語は無数にある。撮影者の意図を超えて、描き出す表現者、そして完成した作品を鑑賞する人々の経験や生活世界が作品と交じり合う。そのとき、学びは「成果」ではなく、「関係」として現れる。そして、点数ではなく、対話が深まっていく。

学校教育で測ろうとしているものは何なのか、私たちの学びはその時、その一瞬で測りとれる性質のものなのだろうか。影の輪郭を描いても、また次の瞬間には別の姿として現れる。どの角度から光を当て、どのようにその作品を受け取るのか、学びの場に集う人々の対話によって立ち現れる作品のシルエットが、社会の生成に関わっていく。

CONNECTEDkind がもたらしたものは、影を通して光を見るような体験である。そこでは「できたか、できないか」「上手、下手」という二者択一で分かりやすい評価よりも、「何が見えたか」「何を感じたか」「そこから何を紡いだか」という内的なプロセスこそが学びの中心になる。学びが生活世界と交わり、そこで生まれるゆらぎや余白、その豊かさに目を向けるとき、教育は生きた思考を育む場へと姿を変えていく。CONNECTEDkind

が私たちに示すのは、評価では捉えきれない学びの動きであり、見えないはずのものに光を当てる想像の力である。教育がそのゆらぎを受け入れるとき、私たちの学びは新しい形を映し出すのであろう。

【参考文献】

桂直美（2021）「芸術批評が提起するカリキュラム構成の枠組み—アートに根ざす授業論—」『教育学研究』88巻3号，39-51.

シルエットボックス（2015）『モーションシルエット：かげから生まれる物語』グラフィック社.

鷺田清一（2019）『想像のレッスン』筑摩書房.

Jickling, B. (2017). Education revisited: Creating educational experiences that are held, felt, and disruptive. In B. Jickling & S. Sterling (Eds.), *Post-sustainability and environmental education: Remaking Education for the Future (Palgrave Studies in Education and the Environment)* . Palgrave Macmillan.